

寺田寅彦と少年新聞

四宮義正

明治39年の寺田寅彦日記に「少年新聞」に作品を発表したと思われる記述が何回か見られる。この頃の日記は非常に簡単であるが以下に引用してみる。

明治39年10月1日

少年新聞二号来る。夜汁粉作る。汽車の音近く聞ゆ。十四夜月よし。御神楽の囃子はやし聞ゆ。

10月11日

靴の修繕出来ざる為、下駄はきて出校す。少年新聞記者来る。

10月15日

夜入浴。少年新聞へ「露」を寄稿す。薩摩芋の海苔巻。

11月19日

別役の兄上など今日御着京の由にてはがき来る。少年新聞もくる。

また、同年10月11日付の別役亮宛て絵ハガキには次のように書かれている。

今夜早々国へ手紙を出して転地の事をすゝめて置た。」毎日退屈の事と思ふ。古雑誌でも送つてやろうか。少年新聞が又次を注文してよこした。今度は何を書くか勘考中。」又雨。松本君の此間のロングフェローを思出す。

(注：いずれも読点を追加した。)

しかし、寺田寅彦全集第17巻の著作目録を調べても「露」を含めて少年新聞に掲載した作品は見当たらない。おそらく全集編集時には散逸してしまっていて発見できなかったのであろう。このたび、この「少年新聞」第3号(明治39年10月6日発行)を見る機会を得た。そこには寅彦の投稿が掲載されているので紹介する。

はさみ あそ
鋏の遊び

理科大学 寺田寅彦

おつか 阿母さんの処から、チョット鋏はさみを拝借して来て次のような実験をやつて御覧なさい。一図のような鋏の「イ」の処はいしやくを持って「ロ」の処てのひらを掌ひざか、膝へ打ちつけると、鋏は振動して、図のように、さきが広がって見えます。先の開いた腰の弱い鋏がよいのです。洋紙の片すみへ墨を一滴落したのを、二図の様に左の手で持ち、右の手で鋏を斜はすに持ち、鋏が振れて居るうちに其尖そのさきで軽く墨なを撫でて、御覧なさい。三図のような波型の線が出来ます。手早くすれば甲のようになり遅くすれば乙のようになる。少し呼吸がわかれば三図よりはズットよく宜出来るでしょう。ステッキで、地面へ波をかきながら走ゆって行くと同じわけですが、鋏の振れるのは大変に早いから、チョット見ては振れて居るのがわからないのです。

次には四図の様に左手の五本の指ゆんでを格子の様にうえしたして、上下に早く動かしながら鋏のふれて居るのを指の間から見ると鋏の両側には五図の様に歯型が見えます。

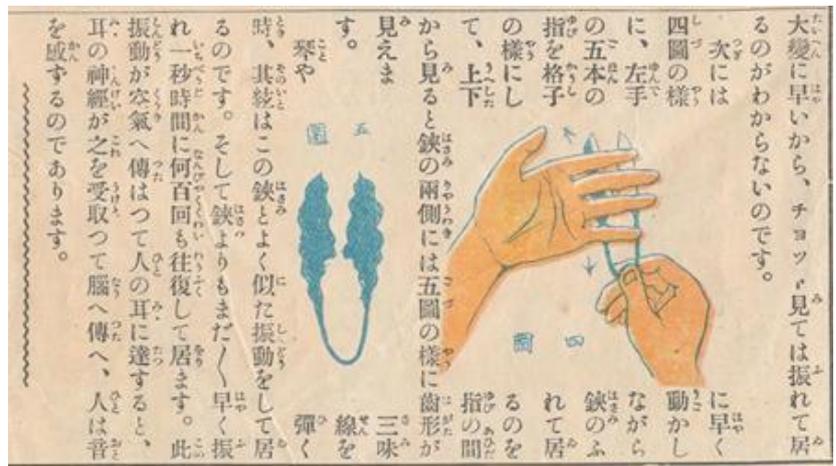
琴や三味線を弾く時、其絃はこの缺とよく似た振動をして居るのです。そして缺よりもまだ早く振れ一秒時間に何百回も往復して居ます。此振動が空気へ伝わって人の耳に達すると、耳の神経が之を受取って脳へ伝え、人は音を感じるのであります。

(注：漢字の旧字体は新字体に改めた。かな使いを一部改め、漢字のルビは一部省略した。)

原文の写真を下に示す。



左：三図、波長の長い線が甲、短い線が乙、中央：二図、右：一図、腰部がイ、刃部がロ



左：五図、右：四図

一見して驚いたのは本名で所属（理科大学）まで堂々と書いてあることである。しかし著作目録をよく見ると、同じ頃「嵐」や「森の絵」を「ホトトギス」に発表しているが、これも本名である。初期には筆名で牛頓（ニュートン）を使用しているが、藪柑子などと署名するのはもう少し後のことである。

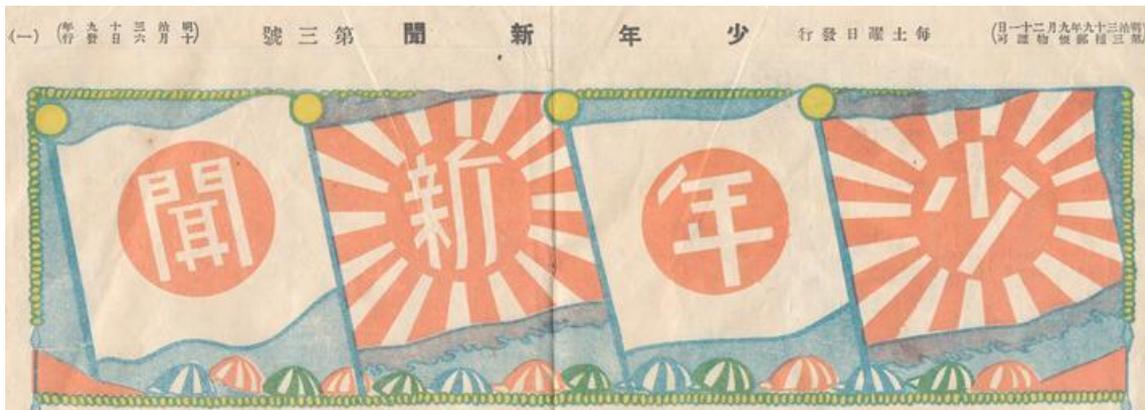
寅彦の明治 37 年の論文に「A Note on Resonance-Box」(音叉の共鳴箱の振動に就て、明治 41 年 10 月 3 日官報の記載)があり、振動に関してはレーリー卿の「The Theory of Sound」(音響理論)を読み込んで研究を続けており得意分野であった。日記によると明治 35 年 12 月 13 日、「レーレーの Sound」を中西屋で購い連日のように愛読している。同年 12 月 29 日には修善寺温泉の桂川に面した野田屋疑雨来館に宿泊して「夜 Sound を読む」

と書いている。この時の事は中谷宇吉郎に「僕は卒業前の正月休みに、レイレーの音響学を持って修善寺へ行ったことがあるがね。湯に入ってはレイレーを読み、湯に入ってはレイレーを読むという生活は実に楽しかったな。到頭二週間近くで全部読み上げてしまったが、あれは後々まで随分役に立ったものだった。」（中谷宇吉郎：先生を囲む話）と語っている程であり、記者の求めに応じて専門知識を活かして書いたのであろう。

試みに、手元にあった握り鉋を使って実験してみたが振動の減衰が非常に早くて、三図のように引いてみる時間がとれないし、五図の形の確認はできなかった。腰の弱い鉋であれば、もう少し長く振動するのかもしれない。音叉ほどでなくても振動がある程度継続する握り鉋はあるのだろうか、と思ったりした。

なお、この3号には他に江見水蔭、中島孤島、寺崎七草などが寄稿している。

少年新聞についての手掛かりとしての記載は、発行兼編集人朝山勇四郎、印刷人鶴澤幸三郎、印刷所精美堂、発行所東京市浅草区須賀町二番地少年新聞社、投書先東京市小石川区表町七十三番地少年新聞編輯所、と書かれている。また明治39年9月21日第3種郵便物認可毎週土曜日発行、定価三銭五厘、郵税五厘、合計四銭とある。体裁は見開きの全4ページ、ページ寸法は縦約46cm×横約32cmである。現在の新聞紙より二回りくらい小さい感じである。少年向けのためか題字は派手であり、各文章にはカラーの挿絵が多い。



少年新聞 題字部分

インターネットで朝山勇四郎や少年新聞について検索してみたがほとんど手掛かりは無く、この新聞と繋がりをもった経緯などは全く分らなかった。投稿先の小石川区表町73番地はお寺の多い地区で伝通院の近くであり、当時寅彦の住んでいた原町10番地と地理的には近い。

毎週土曜日発行であれば2号が9月29日、1号が9月22日発刊と推定される。10月1日に配達された少年新聞2号にも寅彦の作品が掲載されていたのではないかと思われる。また「露」という作品も読んでみたいものである。

(注) Rayleighの日本語読みが異なっていますが原典表記を基本にしています。